

# 遊休農林地を利用した現地放牧実証試験（第1報）

塩崎達也・森本一隆・川戸和昭

## 要 約

鳥取県内でも中山間地を中心に年々遊休農林地が増加している。遊休農林地に黒毛和種繁殖雌牛を放牧することは地域資源の有効活用を図りながら景観保全に役立つ方法として注目されている。15年度に県内遊休農林地（3ヶ所）で電気牧柵を用いて放牧を行い以下のことが確認できた。

- 1 遊休農林地に黒毛和種繁殖牛の放牧を行っても放牧前・放牧後の体重変動も少なく、また血液検査結果（PCV）からみても健康的に問題なく飼養できた。
- 2 放牧に必要な面積は草の種類にもよるが2頭を1ヶ月放牧するには30a程度必要であった。
- 3 春から秋までの2頭放牧するには、1haを3牧区（30a程度）に区切ることにより可能であった。

## 緒 言

県内の遊休農林地は増加の一途をたどり、そこで生産される草資源は利用されず、景観保全上からも問題となり、耕種農家も対応に苦しんでいる。一方、畜産農家は効率的な飼養管理技術による生産コストの軽減が求められている。そこで、遊休農林地に牛を放牧することにより、未利用地の草資源の活用と景観保全を図りながら、健康的に繁殖雌が飼養できることを実証した。

## 材 料 及 び 方 法

当場に繋養されている放牧経験牛を用いて、県内の遊休農林地において、電気牧柵を用いた簡易放牧を行った。

（1）出前放牧 放牧資材・牛を試験場が用意し、放牧を行った。

- 1）東伯郡赤碕町：放牧頭数3頭、面積約30a（元畑地）、電気牧柵を利用し、景観保全のための短期間放牧を行った。

放牧期間：平成15年10月29日～12月11日

地形・草種：平地・クズ、セイタカアワダチソウ主体  
水飲施設：農業用タンク、ウォーターカップ<sup>®</sup>、ホースを利用

捕獲方法：移動式スタンション

日常の管理：畜産試験場職員（濃厚飼料の給与なし）

衛生管理：4週間に1回ダニ駆除剤の塗布

- 2）東伯郡東伯町：放牧頭数2頭、面積約110a（元梨園）を3牧区（30a、30a、40a）に区切った。

放牧期間：平成15年5月22日～10月30日

地形・草種：緩傾斜地・ススキ、クズ主体

水飲施設：水道水を利用（ウォーターカップ<sup>®</sup>、ホース）

捕獲方法：追込柵（固定式）

日常の管理：地権者に依託。濃厚飼料の給与量は1日

1頭0.5kg

衛生管理：2週間毎に採血と、4週間毎にダニ駆除剤の塗布を行った。

### （2）レンタル放牧

牛だけを試験場が用意し、放牧資材は放牧する集落が準備し、放牧を行った。

鹿野町：放牧頭数2頭、面積約50a、元水田

放牧期間：平成15年10月7日～12月11日

地形・草種：棚田状・クズ、ススキ、ササ主体

水飲施設：谷水を利用

捕獲方法：スタンション

日常の管理：鹿野町職員。濃厚飼料の給与量は1日1頭0.1kg。

衛生管理：21日間隔で殺ダニ剤の塗布

## 結果及び考察

### (1) 体重及び血液検査(ヘマトクリット値)の状況

出前放牧：赤碓町の事例

放牧期間は平成15年10月29日から12月11日までの44日間であった。体重測定及び血液検査(ヘマトクリット値)は、放牧前と放牧後に行った。体重及びヘマトクリット値は放牧終了後に減少した。しかし、ヘマトクリット値の値は30以上であり健康上特に問題がなかった。

3頭を30aの面積に放牧するには期間が長すぎたと思われる。30aの面積では2頭を1か月～1か月半の放牧が適当であると考えられた。

表-1 赤碓町の事例

	327号		333号		335号	
	ヘマトクリット値 (%)	体重 (kg)	ヘマトクリット値 (%)	体重 (kg)	ヘマトクリット値 (%)	体重 (kg)
10月29日	38	556	41	542	41	594
12月11日	31	488	34	459	38	504

出前放牧：東伯町の事例

放牧期間は平成15年5月22日から10月23日までの165日間であった。体重は放牧前、放牧後とも差がなかった。ヘマトクリット値は、放牧後10週間は放牧前の水準が維持されたが12週間以降は低下したが放牧終了時まで維持された。110aの面積を3牧区に区切り、草の状態を見ながら牛を移動することにより2頭を春から秋まで放牧することが可能であると考えられる。

レンタル放牧：鹿野町の事例

放牧期間は平成15年10月7日から12月11日までの66日間であった。体重は放牧前、放牧後で差はみられなかった。ヘマトクリット値は減少したが特に問題なかった。2頭を50aの面積で2ヶ月間放牧が可能であると考えられる。

表-2 東伯町の事例

	327号		335号	
	ヘマトクリット値 (%)	体重 (kg)	ヘマトクリット値 (%)	体重 (kg)
5月22日	35	570	43	560
6月2日	40		42	
6月19日	37		39	
7月3日	37		40	
7月17日	36		40	
7月31日	36		40	
8月12日	33		33	
8月28日	32		34	
9月11日	30		35	
9月25日	36		34	
10月23日	31	566	34	572

表-3 鹿野町の事例

	376号		378号	
	ヘマトクリット値 (%)	体重 (kg)	ヘマトクリット値 (%)	体重 (kg)
10月7日	34	406	35	452
12月11日	30	418	32	442

### (2) 放牧利用後の状況

野草(雑草)が茂っていた草地も食べ尽くされ裸地化した所も出た。しかし、牛が食べない草あるいは嗜好性の悪い草(ヤコボウ、ギギシ等)が食べ残されて草地の中の優占割合が高くなる傾向が見られた。

事例：赤碓町

(放牧前)





(放牧後)



事例 : 鹿野町

(放牧前)



事例 : 東伯町

(放牧前)



(放牧後)



(放牧後)



## ま と め

遊休農林地での放牧は、景観の保全に有効であることが確認できた。また和牛繁殖農家にとっては、飼料費の節減、堆肥処理の省略、労働時間の短縮が期待できる。

今後の課題としては 電気牧柵の導入コスト 近隣住民の理解を得ること 放牧に慣れた牛の確保などが挙げられる。電気牧柵の導入経費は、放牧期間に購入飼料の給与をほとんど必要としないため春から秋(6ヶ月程度)まで2頭を放牧すれば2年間で購入飼料費用分の節減で導入可能と考えられる。近隣住民の理解は非常に重要で後でトラブルが発生しないためには必要である。放牧に

慣れた牛の確保は、鳥取県内の公共牧場で年間 100 頭以上の放牧牛が預託されている。放牧経験牛の登録などが必要である。また、遊休農林地は野草主体のため放牧後の裸地化、不採食草の優占割合が増えるなどの問題を克服するためシバ型草地の造成を行い牧養力の維持 日陰のない場所での庇陰施設 水源のない場所での飲水放施設（例えば雨水を集積する施設）の検討が今後必要であると思われる。

## 引 用 文 献

栗原昭宏ら：鳥取県畜試研報 29：17～20  
(1999)